



【秋田県版】
No. 359
2021年5月15日

治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟

発行人：田中幹夫
〒113-0034 東京都
文京区湯島2-4-4

秋田県本部

〒014-1413
秋田県大仙市角間川町
字東中上町27
最上健造 方

TEL&FAX
0187-65-2115

「コロナ禍」に負けないとはどんなことか

菅政権の災難便乗型の戦争国家づくりに 負けない同盟活動を

県本部長 最上健造

菅首相のあまりの無為無策、根拠のない高い自己評価。苦しんでいるのは私たち国民。しかし菅政権は、「戦争と暗黒政治」に道を開く反動的策動は、抜かりなく手を打っている。

しないよう細心の注意を払いつつ、菅政権の「戦争する国」づくり、弾圧できる国づくりに負けない運動を進めることが重要ではないだろうか。「コロナ禍」が終息した時に、菅政権の黒い旗が残っているのか、私たちの反戦・平

就任してからまだ一年だが、菅政権の軌跡は恐ろしいといえる。国民が「コロナだ」「オリンピックはどうなる」に関心が集中している事を「好機」として、悪法を成立させようとしている。私たちは「コロナ」に感染



同盟運動の目的

ふたたび戦争と暗黒政治を許さないために

- 1、国は、治安維持法が人道に反する悪法であったことを認めること
- 2、国は、治安維持法犠牲者に謝罪し、賠償を行うこと
- 3、国は、治安維持法による犠牲者の実態を調査し、その内容を公表すること

和の希望の旗がひるがえって
いるのか、その分岐に立って
いるといえる。

■菅政権の異論排除に負けない

菅政権が就任して第一の仕事が、学術会議会員の任命拒否だった。政権に異を唱える者を排除する強権政治だ。学術会議法、憲法にも違反する立憲主義否定、戦前回帰の独裁路線である。これに負けてはいけない。

■陸上「イージス」より危険な軍拡に負けない

安倍政権の「イージス・アショア」の秋田県、山口県へ配備は、歴史的闘いで断念に追い込んだ。しかし菅政権は、迎撃でなく「敵基地攻撃能力」

をもつ「イージス・システム搭載艦」の導入を、国会の論議も尽くさぬまま強行しようとしている。敵基地攻撃は戦争に他ならない。費用も天井知らずだ。これを許してはいけない。

■監視社会づくりに負けない

菅政権は「デジタル庁設置法」によって、内閣が個人情報報を直接監視し、情報体制を強化し「治安体制」の実現をめざすものである。また軍事基地周辺の利用を規制する「重要土地等調査規制法」は、「新たな治安維持法ともいえるべき危険な法律」(琉球新報 3・27)である。国民監視を常態化し、プライバシー侵害、基本的人権踏みこむ企みに負けてはいけない。

訂正

前号の棚橋正博「寄稿・棚橋貞雄のことども」(その1)にいくつかの誤字・誤植がありましたので、お詫びして次のように訂正します。

- ・2ページ上段11行目 「遺骨が拾われたもの」 ↓傍線削除
- ・3ページ上段17行目 「誤・維持↓正・遺児」
- ・3ページ上段後から3行 目「反応がないばかりか、」
- (※)「まあ」↓(※)に次の文を挿入します。
- 「祖母の悪口が並べられ、彼らの母親が後妻のために苦渋を味わったという話ばかりで」
- ・3ページ二段落目後から8行目「誤・格好↓正・恰好」

2020年11月1日付しんぶん赤旗から

「100年前、声を上げた女性がい」読んでみましよう

読書

伊藤千代子 時代の証言者 (増補新版)

藤田廣登 著



学習の友社・1600円

ふじた・ひろと 34 年生まれ。労働者教育協会理事。『ガイドブック・小林多喜二の東京』(共著)ほか

こころざしをつたふれし少女よ 新しき光の中におきておもはむ 高き世をたためさず少女等ここに見れば 伊藤千代子がこの見れば 伊藤千代子とてそかなしき

1935年、雑誌『アララギ』に発表のち第4歌集『六月風』に収められた。伊藤千代子は土屋文明の諏訪高女時代の教え子で、千代子の聡明さを将来を期待し、妻アル子ととも心を傾けて導いたのであった。千代子のはちに東京女子大に進み、科学的社会主義を自らの

ものにすると同時に、学内に強力な「社研」を組織すると共に、全国的な「女子学連」づくりに力を注いだ。千代子は、小林多喜二の小説でも知られる「三・一五事件」で逮捕された。特高警察の拷問と、夫の転向という二重苦の中で、覚悟としての誇りと原則を堅持し、昂然とたたかっていた。29年8月に拘禁精神病を発症し、松沢病院に入院、9月24日に急性肺炎で、わずか24歳で命を終えた。

伊藤千代子についての先行諸研究を受けつぎその正誤も正しつつ、本書では、この10年来の著者による新発見の資料や同時代者のあらたな証言の発掘などが総括され、伊藤千代子研究の高い到達点が築かれている。著者自身の労作である。多くの人々、とりわけ次代を負う若い人たちに読んでいただきたい。本書の中で、東京女子大の安井てつ子の「学長文書」の発見を語る第6章は力があつた。「三・一五事件」で、検挙、連行される教え子の学生に、安井てつ学長が、留置場の夜寒を案じて、一人ひとりの背中に真綿を背負わせて送り出したという一節は、まぶたを熱くする。土屋文明と安井てつ子の二人の真の教育者の姿も本書で光る。

評者 碓田のぼる 歌人

「再録」シリーズ③ 県版「不屈」No.6 (1991年10月)より

手記『農民党の子つこ』と呼ばれて

佐藤 ツイ

この手記は、同盟大曲仙北支部事務局長の長沢さん、大曲市会議員の佐藤ふみ子さんの要請にこたえ、同盟県本部顧問佐藤儀右衛門さんの娘・ツイさんが「娘の目に父親の戦いが正義として映し出されるまでの思いを」書き綴ったものです。長沢さんから「不屈」に寄せられました。なおこの手記は赤旗読者ニュース「こんにちがふみこです」にも連載されています。

唯、懐かしさのあまり、父の胡坐(あぐら)に抱かれた。菓子などめつたになかった頃なのに、白、ピンク、黄色の砂糖のかかった円いビスケット、テロテロした菓子袋を買い、胡坐の中で食べた時のことが忘れられない。大きくなって知ったのだがそれは、刑務所に二年三ヶ月入って来た時の夜だった。

それから私達も大きくなりいろんな話も聞き、いろんな事も言われました。当時の共産党と言えば、罪人のように言われ、赤旗新聞を見る事や、口にする事も出来なかったという。今のように言論にも自由はなかった。もし、「天皇ヘイカ」と口にしたら、すぐにも警察が来て逮捕という事だったそうです。

又、小作人を守るための地主制度に反対する運動もし、共産党員として頑張って来たそうで、その子供として私達兄妹を当時世間の

人は農民党の子つこ呼びました。「農民党の子つこが来た」と学校へ通うたびに道で会う大人の人に言われ、ひそひそ陰口を言われた事などを思い出します。

《権力にたちむかった母》 学校から帰ると、父の留守に、警察が来て母と喧嘩をしているのを見ました。 当時、四ツ屋の山形巡査が先になつて三人、家に土足で入ろうとした時、母は女一人で薪を振り回して「家のド(父さん)何ワリゴドした!何しに上がりこむ!早くドどこ牢から出して来い」と警察と激しく言い争ったのを覚えています。

又、警察は、母の留守の間に家に来て座り込み、私達をならみつけていました。母が裏から帰って来て隠れているのを見て見ぬ振りをして、警察の帰るのをじつと待ったこともありました。今思えば子供ながら良くこらえたと思つています。

当時母は三十年代でした。父のいない時が多く、苦勞は絶えなかつたと思います。何か悪い事でもしたかのように、世間は白い目を向

け、共産党はいやだ、農民党の子つこと大人たちに言われてきました。父は泥棒もしていない、人も殺していない、他人の家に火もつけていない、悪い事は何もしていないのに、唯、不思議でなりませんでした。

《編笠の父の姿をみて》 又、供出制度が行われ、飯米まで取り上げられ、ある家では種籾まで取り上げられた当時、父は、執行者に対して、飯米までは渡されないと言つて争つたそうです。

又、二回目の刑務所行き、不応罪で一年の刑、二年の執行猶予、釈放となつて帰つて来た時は、飯米もなくなつた人々が私の家に集まり夜に※抜穂した事を夢のように覚えています。

※穂抜II地主が立計列をして穂数を調べる事で収穫量がわかり、小作料を決めていた。抜穂は小作料を少なくするため、立計が行われる前の夜中に行つたという。

不応罪で刑務所にいる父に、母と面会に行つた時のことを思えば、背筋がゾツとします。面会室に来た父は、三角の網笠を顔が見えな

《父が刑務所から帰った夜》

私は昭和五年生まれ。たしか六才の頃の記憶だと思ふ。眠つてたところを起こされ、父が帰ってきたと母が言った。その頃は、電燈はなく、ランプ、火棚を吊るした囲炉裡トロト燃える薪火、ぼんやり父の横顔が見えたような気がする。小さい私は、父が何処へ行って来たのか分からなかったが、

いように被り、手を紐で結び出て来ました。その姿は何とも言えぬ淋しきで、私は、まだ幼いながらその場で泣いてしまいました。

《鍛えられた共産党員》

また父は、刑務所を出てからも飯米のない人のため、一俵米を持ってきて、米を分けたりした事も記憶にあります。秋のハサ掛けの時は、ハサの一番下の根立てという所に掛けた稲を抜き取り、足踏み機械で脱穀して、何人かで粃を分けて行った事もありました。

さて、地主から小作農家に田んぼが渡された(農地解放)と言う頃、小作人の先頭に立って頑張り、人々の喜びも聞いておりますが、一方地主側は、「ギエモンに田を取られた」と言ったり、私に対して、「お前の親父に俺の田取られた」などと言う人もいて、会う度にののしられたものです。

父はどうして人の田を取り上げたんだらうと思いました。父はよく言っておりまして。「昔は戦争反対と言っては刑務所、飯米を守るため先頭に立てば刑務所。自分の思い、不満を今のように言うことができなかった。今は大きな声

で共産党を叫ぶことができる。父の喜んでいる顔を見ると、当時留守を守った亡き母を今日まで生かしておきたかったと思います。

二度の刑務所行、幼い私達を抱えて、母は党を守ったと思います。家宅捜索に来た警察と争う母の姿が今でもはつきり見えます。

この頃、こんな話を聞きました。父がまだ現役の頃、花館方面で水路の件で隣同士が争い出し、議員五、六人立合に出たそうですが、決まらず、警察の立ち合いになったら、議員は一人減り二人減りして、結局、儀右工門一人残って話を纏めたそうです。当時、儀右工門の偉さ、強さは共産党抜きで褒めようでした。が、父は若い頃から刑務所生活で鍛えられた共産党であつたからだと思いました。

《「赤旗」を配り歩いて》

六才の頃から見てきて知った私の記憶書き、その頃の様子を昨日のように見えたりする事もあります。警察と争う母の声! 刑務所から帰った父を守る我が家の空気...、稲穂を抜き取る時、うす暗い闇の中から聞こえてくるススス...:ススス...という稲の中を歩

く淋しげな音、今だに耳に聞こえます。そんな中で育った私も、気づいた時は赤旗を背負って歩いておりました。父も強かったし母も強かった昔の事、辛い事、恐ろしい事、色々な味を知りながら大きくなり、今はもう六十才と...

四月の市議選の時、良くまあ:ツイさんママに歩いたもんだとたまげられました。若い頃から赤旗を配り歩いた足が強いんだなと自分でも思います。四ツ屋駅に取りに行き、配りながら歩いた冬道。今は、夫と分け合い、吹雪や雨には嫁も協力してくれます。

(中見出しは編集部)

《佐藤儀右工門さんの略歴》

一九〇二年(明三五)年仙北郡四ツ屋村(大曲市)高関上郷の農家の一人息子として生まれる。九〇歳。

一九二九年(昭四)全農支部四ツ屋農民組合に加入、のち支部長となる。三〇年(昭五)全農仙北支部協議会に参加し、仙北郡内の小作争議などで闘う。三二年(昭七)日本共産党に入党、同年十一月に治安維持法違反で検挙、懲役

二年の判決を受け、三三年(昭八)出獄するが、以後、保護観察に付される。

戦後日本共産党の再建に参加し、四六年(昭二一)四月の第一回総選挙(全県一区連記制)に日本共産党から立候補し九八三票の得票をうる。四七年(昭二二)四ツ屋村農地委員、同村議、同食糧調整委員長をつとめるが、強権供出と闘い、供出米不応罪で検挙投獄、さらに日本共産党に対する占領軍からの指示弾圧で政令違反として検挙投獄された。

以後、農業委員、土地改良組合理事長、農協理事などを務める。また、日農秋田県連の統一再建に参加し、農民組合秋田県共闘会常任委員、日農県連常任執行委員として活動。日本共産党秋田県委員、同仙北地区委員長、大曲市議会議員などを歴任、現在、日本共産党県委員会顧問。

◎十月五日に同盟大曲仙北支部の長沢さんから「最近、佐藤儀右工門さんから奥さんに口述した一九二九年代の活動メモが手に入りました」という報告書が送られてきました。(※以上全文再録)

朝ドラ「おちよやん」の戦争と弾圧と女性の自立



「おちよやん」と戦死者

2021年前期のNHK連続テレビ小説(朝ドラ)「おちよやん」が終わった。主人公の早口の大阪弁が聞き取れず閉口したが、今回も戦争と人間のドラマが描かれた。主人公「お千代」の周りにいる多くの人が太平洋戦争で命を奪われた。人々は悲しみと苦しみのなかで懸命に生きた。

そんな戦後社会のなか、芝居が人々に安らぎと笑いと希望を与えていった。文芸、文化のもつ力だ。大震災のときも、今の「コロナ禍」でも、

文芸・文化が人間の生きる力の支えであることと通じている。

▼特高と弾圧

今回の朝ドラは、モデルのいる「実録路線」だ。モデルが必ずしも一人というわけではないが、浪花千栄子、花菱アチャコ、渋谷天外などである。その中で特高警察に追われる女優とその恋人が出てくる。そのモデルは共産党員の演出家・杉本良吉と女優・岡田嘉子だ。共産党やプロレタリア文学・演劇が弾圧された時代だ。朝ドラではその後の二人の結末は出されなかったが、杉本と岡田は樺太の国境を越えスターリン支配下のソ連に「亡命」する。「愛の逃避行」と話題となった。杉本は不当にも逮捕され、不幸に

してスパイとして銃殺される。岡田はソ連で投獄されたが、戦後8年間の獄中生活のあと釈放されソ連で活動した。一時日本に帰り「寅さん」映画や「徹子の部屋」などに出演したが、自らの意思でソ連に帰り、ソ連で没した。ドラマではこれは表に出さず、隠れた史実だった。「二平」役の二代目渋谷天外は、この二人をかくまい支援したという。

▼女性の自立

もう一つの見どころは、「お千代」が女優高城百合子(モデル岡田嘉子)から頂いた脚本『人形の家』を大事に保管し、終戦直後、その台詞を一人語りする場面だった。事実かどうかかわからないが、家父長制度に対する作者と主人公の深い思い、戦後を生きた女性の決意が伝わる一場面だった。かなり評判を呼んだらしい。

『人形の家』は、ノルウェーのイブセンの作品で、1979年デンマークで上演された。近代劇、リアリズム演劇の代表作といわれ、フェミニズム運動の勃興とも関連し話題にされた。1911年には大阪でも上演されたという。女性の自立を印象的に描いた場面だった。

▼「しんぶん赤旗」評

「しんぶん赤旗」は日刊紙、日曜版とも毎週「あらすじ」を紹介しているが、4月26日(月)の「波動」(9面)で、メディア文化評論家の確井広義氏が『実録路線の呪縛』を書いている。実像モデルとフィクションの関係、役者の演技についてちよつと辛口に評している。(も)

※次頁に「しんぶん赤旗」の記事を掲載しています。



波動

碓井 広義

終盤に差し掛かってきた、NHK連続テレビ小説「おちよん」。ここまで見て感じるのは、実録路線の呪縛である。

実録路線の呪縛

主人公、千代(杉咲花)のモデルは浪花千栄子だ。「大阪のお母さん」と呼ばれたことは事実だが、代表作を即答するところが出来ない。名脇役だった女優の顔と名を広めたのは歌音のCMだ。

実録路線の難しさは、まさにモデルの存在にある。「なかつたこと」があったように見せるのは

親。幼い頃から、まるで売り飛ばされるように何度も華公に出された。

演技は兎事なものだ。しかし残念なことに、その愛らしい童顔と相まって、千代が何歳になろうと生真面目な女子高生に見えてしまう。もちろん、これはキャストینگした制作側の問題であって、杉咲に非はない。

5月17日からは、新たな朝ドラ「おかえりモネ」が始まる。こちらは架空の女性が主人公だ。ヒロインの架空路線には、「あまちゃん」(15年)のような真色の傑作もある。気仙沼生まれで、気象予報士を目指すという期待したい。

もう一点、主演の杉咲花である。高い集中力の(うすい・ひろよし)メディア文化評論家

▲しんぶん赤旗4月26日号「波動」から

勇進さんが、イージス・アショア配備撤回のたたかいを1冊の本にまとめました。

イズミヤ出版
定価：1,430円 [税込み]

編集後記

359号をお届けします▼昨年暮れの健康診断で、血糖値が異常に高く「これは入院レベルです。かかりつけの医者にきちんと診てもらってください」と宣告された。すぐその日に観てもらったところ、やはり同じ診断だった。「相川さん入院ですね」「ちよっと待ってください。何とか入院せずに治すことはできませんか」「それでは約束できませんか」と言われたその中身は①酒をやめること。②間食しないこと。③軽い運動(ウォーキング)毎日すること。④食事の内容に気をつけること▼結論から言ううとすべてクリアして、健康体になった。体重も10kg減量なった。健康を理由にこの編集を断ることができなくなつた。がんばるか。

(相)